「二・二六事件と広田弘毅内閣」　メモ

●問題は、二・二六事件を鎮圧した後だった

二・二六事件

昭和11年2月26日早朝、陸軍皇道派の青年将校率いる1,483名、完全武装の大部隊が首相官邸、政府要人を襲撃、斎藤実(内大臣)、高橋是清(蔵相)ら4人を殺害した。反乱は29日に鎮圧されたが、岡田啓介内閣が総辞職、広田弘毅内閣に。

▽皇道派・統制派の　派閥抗争　権力闘争
▽陸軍に　粛軍を徹底させ　政治介入をやめさせる
　立憲政治の秩序確立の　絶好のチャンスだった
▽結果は　全く　逆になった
▽皇道派は　壊滅したが
　統制派の幕僚グループは　政治的発言力を強め
　準戦時体制　国防国家体制を　作り上げていった

●真っ先に急がなければならないのが、後継内閣組織
▽「粛軍第一は国民の声」

「転禍為福の一大決心を要す」

後継内閣は力強く現難局を担当するに足る、真の挙国一致内閣であらねばならぬ。しかもその内外の政策を遂行するに当っては、飽くまでも立憲政治の大道を進む信念と勇気の持主たるを要する。払はれた犠牲が余りに高価であり、余りに深刻であっただけに、来るべき内閣に対する国民の要望は、極めて真剣かつ切実である。かくの如き非常手段をもって、国家の政治を変更せんとするものが、皇軍のうちから現れたことは、まさに重要軍職にあるものゝ責であり、粛軍第一は国民の声である。

(東京日日　3月1日付社説)

本庄繁(侍従武官長)**の日記**(3月4日)

四日午前九時、御召アリ、
此際、十分ニ粛軍ノ実ヲ挙ゲ、再ビ斯ル失態ナキ様ニセザルベカラズ

▽後継首相の選考は　難航した

斎藤　実(さいとう・まこと)
安政5(1858)～昭和11(1936)　岩手県生まれ。海軍大将。明治39年海相。5代の内閣で海相を務め大正8年朝鮮総督。昭和2年ジュネーブ軍縮会議全権全権。朝鮮総督再任を経て7年首相に就任、満州国承認、国際連盟脱退を行なう。10年内大臣となり、二・二六事件で暗殺される

高橋　是清(たかはし・これきよ)
安政1(1854)～昭和11(1936)　江戸生まれ。日銀副総裁の時、日露戦争の外債募集に成功。総裁を経て大正2年山本内閣蔵相。原内閣蔵相となり、10年原暗殺で首相兼蔵相。昭和2年田中内閣蔵相に就任、金融恐慌を収拾。犬養、斎藤、岡田内閣蔵相を務め、二・二六事件で暗殺

岡田　啓介(おかだ・けいすけ)
明治1(1868)～昭和27(1952)　福井県生まれ。海軍大将。連合艦隊長官を経て昭和2年海相。7年海相再任。9年首相就任。二・二六事件で襲撃されたが、危うく難を逃れる。太平洋戦争中、重臣として終戦和平に尽力。著に「岡田啓介回顧録」

広田　弘毅(ひろた・こうき)
明治11(1878)～昭和23(1948)福岡県生まれ。外務省に入り、欧米局長などを経て昭和5年ソ連大使。8年斎藤内閣外相。岡田内閣にも留任、北満鉄道買収、中国に対する和協外交など国際連盟脱退後の国際情勢に対処した。11年二・二六事件後に首相就任。軍部大臣現役制復活、日独防共協定調印など国防国家体制を推進した。12年近衛内閣外相。東京裁判で文官中ただ1人絞首刑になった

●まず、内大臣を誰にするか

▽2月28日（「反乱鎮圧」の奉勅命令が出た）

一木喜徳郎（枢密院議長）　湯浅倉平（宮内相）

木戸幸一（内大臣秘書官長）の間で　善後策の検討

内大臣

明治18年内閣制度創設の際、宮中に設けられた重職。天皇の側近に奉仕して、国家の重要事項について、常侍輔弼の任に当たった。特に昭和に入って大きな発言力を持った。（敗戦で廃止）

▽近衛文麿（貴族院議長）は　健康を理由に　断わる

天皇は、近衛起用に消極的だった

湯浅が内意を伺ったところ、「内大臣には、外交、殊に国際関係に相当蘊蓄のある者がいい」

大正14年に牧野伸顕、昭和10年からは斎藤が務めていた。近衛は閣僚経験もなく、大正7年に「英米本位の平和主義を排す」の論文を発表し、右翼がかった点に懸念があったようだ。元老西園寺公望も、「近衛を結局は内大臣にするにしても、その前に首相をやった方がいい」

結局、内大臣は西園寺の推薦で湯浅に。

▽内大臣を断わった近衛は　後継首相第1候補に

●西園寺は3月2日、坐漁荘（静岡県興津）から上京した

▽二・二六の後でなければ

宇垣一成（陸軍大将・朝鮮総督）を　考えていた

統制力のない陸軍首脳部

西園寺は「どうも陸軍の中心がどこにあるのか分からない。各種各所に中堅があるが、軍全体の中心がほとんどないような状態になっている」岡田も、林銑十郎（陸相）が「どうにも頼りなかった」閣議で了承しておきながら部下から反対されると、簡単に引っ繰り返す。陸大出の中堅幕僚が陸軍を動かす時代に。

陸軍の横暴を押さえるには「毒を以て毒を制す」西園寺は、宇垣には「三月事件」（昭和6年3月、陸軍の宇垣政権を作ろうとしたクーデター未遂事件）のキズがあるが、見識、統率力については「人物だ」と買っていた。

本庄　繁（ほんじょう・しげる）

明治9（1876）～昭和20（1945）　兵庫県生まれ。陸軍大将。昭和6年関東軍司令官、満州事変を指揮。8年侍従武官長、11年予備役。敗戦後自決。遺稿に「本庄日記」

一木　喜徳郎（いちき・きとくろう）

慶応3（1867）～昭和19（1944）　静岡県生まれ。明治27年東大教授。法制局長官、文相、内相を歴任。枢密院副議長を経て大正14年宮内相。昭和9年枢密院議長

湯浅　倉平（ゆあさ・くらへい）

明治7（1874）～昭和15（1940）　山口県生まれ。岡山、静岡県知事を経て大正12年警視総監。内務次官、会計検査院長を歴任し、昭和8年宮内大臣。11年二・二六事件後、内大臣となり、天皇側近随一の硬骨漢として軍部の無理押しに抵抗した

木戸　幸一（きど・こういち）

明治22（1889）～昭和52（1977）東京生まれ。昭和5年内大臣秘書官長。文相、厚相歴任、15年内大臣。天皇側近の重臣として力を揮い、東条を首相に奏請。戦争末期は終戦に尽力。A級戦犯で終身禁固。30年仮出所。著に「木戸幸一日記」

近衛　文麿（このえ・ふみまろ）

明治24（1891）～昭和20（1945）東京生まれ。五摂家筆頭・関白家の出。昭和6年貴族院副議長。8年議長に進み、12年第1次内閣を組織。支那事変で13年「国民政府相手にせず」と声明し解決の道を塞ぐ。枢密院議長を経て15年第2次内閣組織、大政翼賛会を結成、日独伊三国同盟を締結し、枢軸外交、南進策を進めた。第3次内閣で日米交渉に努力したが東条陸相の主戦論に総辞職。敗戦後、GHQの戦犯出頭命令を受け服毒自殺した

▽反乱将校が「宇垣即時逮捕」を要求し
　陸軍部内にも「彼らを犬死にに終わらせるな」
▽3月4日朝 近衛を呼び「貴方を奏請したいと思う」
　近衛は「とても体が三ヵ月ももちません」
　西園寺は「自分の信念によって奉答する」
▽天皇も「卿に組閣を命ず」の後「是非とも」
▽夕方 再び 拝謁した近衛は
　「元来病弱の身、到底この非常時を負担するの重責に当たり得ざることを遺憾と致します」

木戸の話

近衛という男は、消極的な事には非常に強い男だ。内大臣が殺され、首相も襲撃された後だけにね、まあ近衛も、危ないことはお断わりと思ったんだろうね。

近衛は、なぜ組閣を辞退したのか

一つは、親しくしていた皇道派（荒木貞夫、真崎甚三郎）の壊滅。矢部貞治（政治学者）の著「近衛文麿」によると、近衛は岩淵辰雄（政治評論家）に「軍部をどうしたらよいか、方策が樹たない。荒木にどうすればよいか聞いたが、荒木も成算がないと言った。荒木に成算がないのに、私一人でどうにも仕様がない」

近衛はこの頃には政党政治、議会政治を守ろうとした西園寺から、心情的には離れていた。昭和9年10月、富田健治（第2次近衛内閣書記官長）に「今の政党はなっていませんよ。不勉強、無感覚だといって、若い軍人が怒るのも無理はないと思う。今の日本を救うには、議会主義では駄目じゃないかとさえ思う。この議会主義を叩きつけなければならない。が、この議会政治の守り本尊は元老西園寺公です。それが牙城ですよ」

近衛は17年夏、富田を軽井沢の別荘に招き悔恨の言葉。「やはり西園寺公は偉かったと思いますね。終始一貫、自由主義者であり、政党論者であった。僕は大政翼賛会なんて、わけの分からぬものを作ったけれど、やはり政党がよかったんだ。欠点はあるにしても、これを存置して是正するより他なかったんですね」

牧野　伸顕（まきの・のぶあき）
文久1（1861）～昭和24（1949） 鹿児島生まれ。大久保利通の次男。文相など歴任し大正2年山本内閣外相。ベルサイユ講和会議全権。10年宮内相となり、14年から昭和10年まで内大臣。二・二六事件で襲撃され難を逃れる。吉田茂は女婿

西園寺　公望（さいおんじ・きんもち）
嘉永2（1849）～昭和15（1940） 京都生まれ。九清華家の出。文相、枢密院議長。明治36年政友会総裁。39年首相。44年再度首相となり、陸軍の2個師団増設要求を拒否して総辞職。晩年は、最後の元老として国際協調に努め、後継首相を奏請

宇垣　一成（うがき・かずしげ）
明治1（1868）～昭和31（1956） 岡山県生まれ。陸軍大将。大正13年清浦内閣陸相となり加藤、若槻、浜口内閣に留任、4個師団廃止の軍縮を実施。昭和6年朝鮮総督。12年組閣の大命を受けたが、陸軍の反対で断念。13年近衛内閣外相。戦後28年参院選全国区に最高点当選

林　銑十郎（はやし・せんじゅうろう）
明治9（1876）～昭和18（1943） 石川県生まれ。陸軍大将。朝鮮軍司令官を経て昭和7年教育総監。9年斎藤内閣陸相。岡田内閣に留任、真崎教育総監を更迭し二・二六事件の一因に。12年2月首相に就任したが、4ヵ月の短命内閣に終わった

荒木　貞夫（あらき・さだお）
明治10（1877）～昭和41（1966）東京生まれ。陸軍大将。陸大校長、第6師団長など歴任。精神主義的・反共主義的言動で皇道派の中心的存在に。昭和6年犬養内閣陸相となり、陸軍中枢を自派で固めた。二・二六事件で予備役。13年近衛内閣文相。A級戦犯で終身禁固刑。29年仮出所

●突然、出てきた広田外相の名前

▽4日夕 宮内省食堂で 夕食をとっているとき
　一木(枢密院議長)が「広田さんはどうだろうか」

▽陸軍は 対ソ戦備強化を 訴えており
　ソ連大使をやっていて 危機感にも対応できる

▽下馬評にも上がっておらず 後で「ヒロッタ内閣」

▽西園寺は「広田が引き受けるだろうか」

▽木戸が 近衛に電話 広田説得を依頼すると
　近衛も熱意を見せ 吉田茂(広田と外務省同期)を使者に

▽広田は「自分は内政で腕を揮った経験もないし、外交官として一生を終わる積もりでいる。それに政治的なことは得意でない」

▽吉田の 懸命の説得に「元老重臣ご一致の援助を得るならば、お引き受けしてもいい」

▽5日朝 近衛の別邸(目白)で 近衛も加わり説得

▽広田は 外相時代 部下に
　「日本は英雄を必要としない。我々は陛下の手足となってお手伝い出来ればよいのだ」
　内閣の引き受け手がない時
　　自分が 天皇の手足となることを 決意した

●5日午後、組閣の大命を受けた広田は、外相官邸の組閣本部で、吉田を組閣参謀に閣僚選考に入った

▽外相は吉田 内務大臣に川崎卓吉(民政党)
　法相小原直留任 陸相寺内寿一 海相永野修身
　内閣書記官長に藤沼庄平 下村宏(朝日新聞)の入閣

▽6日明け方には 主な顔触れが決まり
　朝刊各紙には 閣僚予想名簿が 掲載された

▽順調だったのは ここまでだった

▽6日午後 陸相就任内諾の寺内が 入閣辞退
　「軍部は広田内閣の組閣方針に同調し難い」

寺内は記者団に「陸軍の要求」を公表

新内閣は真に時弊の根本的刷新、国防充実等積極的強力国策を遂行せんとする気魄と実行力を有することが絶対に必要であって、依然として自由主義的色彩を帯び、現状維持又は消極政策により妥協退嬰を事とする如きものであってはならない。積極政策により国政を刷新することは、全軍一致の要望である。

真崎　甚三郎(まざき・じんざぶろう)
明治9(1876)～昭和31(1956) 佐賀県生まれ。陸軍大将。台湾軍司令官を経て昭和6年参謀次長。荒木と共に皇道派の指導的存在。9年教育総監に就任したが翌年更迭。二・二六事件で軍法会議、無罪

矢部　貞治(やべ・ていじ)
明治33(1902)～昭和42(1967)鳥取県生まれ。政治学者。近衛のブレーンの1人。昭和14年東大教授。戦後は拓大総長

岩淵　辰雄(いわぶち・たつお)
明治25(1892)～昭和50(1975)宮城県生まれ。政治評論家。読売、国民、東京日日記者として活躍し、戦後は読売主筆

富田　健治(とみた・けんじ)
明治30(1897)～昭和52(1977)兵庫県生まれ。長野県知事を経て昭和15年第2次近衛内閣書記官長。27年衆院議員、自由党、自民党所属。著に「敗戦日本の内幕」

吉田　茂(よしだ・しげる)
明治11(1878)～昭和42(1967)東京生まれ。牧野の女婿。奉天総領事、外務次官、イタリア大使を経て昭和11年イギリス大使。14年退官。20年和平工作をしたとして憲兵隊に検挙。戦後東久邇、幣原内閣外相。21年鳩山が公職追放となり、自由党総裁、首相に。5次の内閣を組織し、サンフランシスコ講和条約調印。38年、政界引退後も保守本流の元老として政府、自民党に大きな影響力。国葬

川崎　卓吉(かわさき・たくきち)
明治4(1871)～昭和11(1936) 広島県生まれ。名古屋市長、内務次官を歴任し昭和6年若槻内閣書記官長。民政党に所属し、岡田内閣文相、広田内閣商工相

▽事件の責任を頬冠りにして「全軍一致の要望」

●武藤章中佐（軍務局課員）が、組閣本部に乗り込んで来た

▽片っ端から 内定閣僚に 文句をつけた
吉田は 重臣牧野の娘婿だからいかん
自由主義の急先鋒 朝日新聞の下村入閣に反対
政党人の川崎を 内務大臣にすること
天皇機関説に理解を示す 小原の法相留任

武藤の後日談

広田の組閣方針は全く生温く、革新性に乏しい陣容だった。これでは、軍内の強硬論を押さえて粛軍に徹底しようとする意気込みからしても、到底我慢ならないものだった。清新溌剌な強力内閣でなければ困る。この軍中央部の気持ちを伝えに行っただけで、吉田や下村を個人的に知っているわけではなく、単なる思い付きで引き合いに出したに過ぎない。

▽陸軍が望む「清新溌剌な内閣」とは
自由主義者を排斥し 軍国主義内閣を作れ

●「粛軍第一の時に何事だ」と怒鳴りつけるべきだった

広田が外相時代

2人の陸軍将校が、「中国政策に不満だ」と、血相を変え大臣室に入って来た。「かけたらどうか」とソファを勧めた広田は、将校が「閣下」と詰め寄った途端、穏やかな表情を一変させた。「用向きは、聞かんでも分かっている。いいかね、将来もし君らが軍司令官になって困難な作戦を指揮している時、部外者がとやかく干渉したらどう思うか。広田は陛下から外交を任されているのだ。だから外交は、万事私の判断で進める。わかったか、わかったら帰れ」

▽日本の運命を担う 首相になった時こそ
陸軍の脅迫を 一喝する勇気が ほしかった

猪木正道さん（元防衛大学校長）は書いている

広田の取るべき道は一つしかない。昭和天皇に拝謁して「陸軍の横槍により思うように組閣出来ません。大命を拝辞するよりほかなく

小原　直（おはら・なおし）
明治10（1877）～昭和41（1966）新潟県生まれ。東京地検検事正、司法次官を経て昭和9年岡田内閣法相。14年阿部内閣内相兼厚相。29年に吉田内閣法相

寺内　寿一（てらうち・ひさいち）
明治12（1879）～昭和21（1946）山口県生まれ。陸軍大将・元帥。長州閥・正毅元帥の長男。第4師団長、台湾軍司令官歴任。昭和11年二・二六事件後広田内閣陸相。北支那方面軍司令官を経て16年南方軍総司令官。敗戦後シンガポールで病死

永野　修身（ながの・おさみ）
明治13（1880）～昭和22（1947）高知県生まれ。海軍大将・元帥。昭和11年広田内閣海相。12年連合艦隊長官。16年軍令部総長となり対米英開戦に強硬論を主張した。A級戦犯で拘置中に病死

藤沼　庄平（ふじぬま・しょうへい）
明治16（1883）～昭和37（1962）栃木県生まれ。新潟県知事を経て昭和3年衆院議員。7年東京府知事から警視総監。11年広田内閣書記官長。21年東京都長官

下村　宏（しもむら・ひろし）
明治8（1875）～昭和32（1957）和歌山県生まれ。号を海南。台湾総督府総務長官を経て、大正11年朝日新聞入社。昭和11年副社長。体協・日本放送協会会長を歴任。20年鈴木内閣国務相兼情報局総裁

武藤　章（むとう・あきら）
明治25（1892）～昭和23（1948）熊本県生まれ。陸軍中将。昭和12年参謀本部作戦課長となり、支那事変を拡大。14年軍務局長に就任、日独伊三国同盟、大政翼賛会結成を推進。19年第14方面軍（比島）参謀長。東京裁判でA級戦犯として刑死

なりました」と率直に申し上げることだ。天皇は二・二六事件の毅然たる態度と明快な判断から見て、寺内を呼んで厳しく叱責されたはずだ。そこに日本の唯一の活路があった。昭和天皇は広田の正直な上奏がなければ、立憲君主として陸相候補者を直接叱るわけにはいかない。

「軍国日本の興亡」から

▽天皇は 広田に 三つの注意
①憲法の条規を遵守し政治を行なうこと②外交においては無理をして無用の摩擦を起こしてはならない③財界に急激な変動を与えないこと
▽陸軍が 組閣に干渉すること自体
憲政の運用上 許されることでは なかった

●新内閣は、8日朝までに吉田も、下村、小原も消えた
▽川崎は 商工相に回り 最初の予定者で
変わっていないのは 陸海相 馬場鍈一(蔵相)だけ
▽午後 寺内は 永野(海相候補)と 組閣本部に
軍備充実など「要望書」を読み上げ 広田も同意
▽広田が「これでよろしいでしょうな」
寺内は「ちょっと」別室の武藤と相談
「やはり政党からの入閣は一人でなくては…」
▽広田は 政友会 民政党に
二人ずつの入閣を約束 協力を取り付けていた
▽藤沼(書記官長候補)は 広田と打ち合わせ
陸軍省に戻っていた 寺内に 最後通告した
「組閣遂に成らず、軍部これを阻止すると、明日の新聞に発表しますから、ご承知願います」
▽寺内は「君、ちょっと待ってくれ」
またも 武藤たちの意見を 聞いて
「これから特使に持たせてやる一文に賛成してくれるなら、明日の組閣に同意する」

●広田内閣は3月9日夜成立、政治空白は反乱以来13日目にやっと解消された
▽天皇は 翌10日 寺内を呼ぶと
前例のない「叱責の勅語」を 下された
▽陸軍の前に 膝を屈した罪は 大きかった
ほとんど 陸軍のロボット内閣に

広田にも同情すべき点

なりたくてなった首相ではない。何度も、投げ出したいと思ったろう。宮中筋からは「忍べるだけ忍んで、組閣を全うするように」との強い要請 外務省の先輩も「広田は組閣の完成で、ご奉公は十分。出来ただけでよい。逆にここで断念すれば軍人内閣になってしまう。頑張れ」

すでに10日以上も政治空白。広田も自分に要求されている政局の安定には、簡単に投げ出すわけにいかない。

馬場 鍈一(ばば・えいいち)

明治12(1879)～昭和12(1937)東京生まれ。法制局長官を経て昭和2年勧業銀行総裁。11年広田内閣蔵相。軍事費中心の財政政策を推進。12年第1次近衛内閣で軍部の要請で内相に就任、在任中病没

武藤特使持ってきた一文は

藤沼の話だと、「軍部は悪くない。政治が悪いのだ。庶政(全ての政治)を改革しろ、政党は出直せ」二・二六事件の責任を政治のせいにした勝手放題を並べたものだった、という。

「叱責の勅語」

「近来、陸軍に於て、屢々不祥なる事件を繰り返し、遂に今回の如き大事を惹き起すに至りたるは、実に勅諭に違背し、我国の歴史を汚すものにして、憂慮に堪えぬ所である。就ては、深く之が原因を探求し、此際部内の禍根を一掃し、将士相一致して、各々其本務に専念し、再び斯る失態なきを期せよ」

天皇は重ねて「この趣旨を部下によく徹底せよ」と言われたが、寺内はもう部下の言いなり。陸軍の政治攻勢は、かえって激しくなっていった。

▽17日 閣議の後に「内閣声明」を発表
「庶政一新」が 内閣のスローガンに
国防充実 自主積極外交など
陸軍の要求を そのまま 羅列したものに

西園寺は言っている

斎藤も岡田も、ぐずぐずやっていると言われた。広田もやはりそう言われるだろうが、それなら一つ、軍部と喧嘩してまでやる気があるかと言えば、それだけの気力のある者はいない。喧嘩する気でやる内閣が出なければ結局ダメだろうが、今はそういうものはとても出来ない。結局喧嘩すれば、憲法なんか飛んでいってしまう。今でも半分ぐらい飛んでいるんだから、何と言われても、まあゆっくり段々にやって行くより仕方あるまい。

●陸軍は、広田内閣にゆっくり段々にやって行くことを許さなかった
▽二・二六事件は
皇道派のクーデターを利用した
統制派の「逆クーデター」では なかったのか？
▽極秘文書が 昭和9年1月5日に 作成されていた

「政治的非常事変勃発ニ処スル対策要綱」

非常事態が発生したら「陸軍が革新の原動力となりて時局収拾の責任を負うべきだ」具体的には「戒厳令の下に、軍の希望する後継内閣を組織し、後継内閣の人選にも要求を出し、革新政策を実現させる」
その国内改革の方針は、片倉たちがすでに満州国で実験ずみの国策推進機構 ― 各省を併合して総理大臣を中心とする簡素な機構に改め、その中心部を軍の意向に沿って動かす。

▽二・二六事件は 統制派幕僚にとっては
このプラン実行の 絶好の引き金に
▽陸軍省は 反乱鎮圧の2月29日
プランに基づき「極秘 事件処理要綱」を作成
後継首相が 広田に決まると
早速 閣僚人事に 横槍を入れてきた

「庶政一新」の内閣声明

(3月17日)現下わが国内外の時局は極めて多難にしてその淵源甚だ深し、政府はここに確固たる決意をもって庶政を一新して難局の打開に当たらんとす。…政府は国際情勢の現状に鑑み国防の充実並にこれに関する諸施設の整備拡充に努力すると共に統一ある自主積極的外交の確立を期す

宇垣は「日記」に書いている

西園寺公の首相後任推挙の手筋は、斎、岡両氏(斎藤、岡田)の時と大体に於て同様である。柔克制、剛、時局の紛糾を時の解決に待つ底のものにして、快刀乱麻的に時局を匡救(きょうきゅう=正しく救うこと)すべきの意向は乏しい。

統制派は早くから準備していた

幕僚グループは、皇道派青年将校との話し合いが決裂(昭和8年11月)すると、もはや暴発は避けられないと見て対策プラン作成に着手した。中心は片倉衷少佐で、クーデターが起きたら、それを利用して、どうやって彼らの望んでいる国防国家体制を作るか。

片倉 衷(かたくら・ただし)
明治31(1898)～平成3(1991) 福島県生まれ。陸軍中将。昭和5年関東軍参謀となり満州事変を画策。二・二六事件で磯辺に狙撃され、重傷を負う。各軍参謀を経て20年第202(鵠)師団長

片倉は病床から次々と指示

事件直後、陸相官邸に駆け付けたところを磯辺浅一(元一等主計)に撃たれ、頭に2ヵ月の重傷を負ったが、病院のベッドから、内相に政党人はいけない、蔵相は「高橋財政」を修正する人物など、具体的注文を口述筆記させ、陸軍

●幕僚グループは「ロボット支配システム」も確立した

▽「粛軍」の名の下に 陸軍大将10人中 7人を予備役

残ったのは 皇族以外では

寺内 西義一(教育総監) 植田謙吉(関東軍司令官)

幕僚に都合のいい 操縦しやすい将軍ばかり

寺内は典型的なお坊っちゃん育ち

陸軍では親子二代元帥という華々しい家系。親の七光りで第4師団長、台湾軍司令官を歴任したが、中央勤務がほとんどなく、軍政の経験がない。軍事参議官、大将になったばかりのところへ、はからずも大臣の椅子が回ってきた。何も分からないから、何でも武藤中佐に相談、その言いなりに動いた。

▽川島義之陸相はじめ 皇道派荒木 真崎が予備役

陸軍は「粛軍の第一歩」と 宣伝したが

実際は 下の突き上げで 辞めさせられた

「陸軍下剋上」の実態

有末精三少佐(軍事課員)は3月2日、武藤中佐に呼ばれ、「植田、寺内、西の三大将以外の軍事参議官は全て辞めてもらう。貴様、それを言いに行け」まず大臣からと、次官、局長立ち会いで川島に引退を勧告。渋る様子だったので「大臣自ら辞表を闕下に捧呈、現役を退かれるのが先決でありましょう」

後は荒木が「我々が辞めて、誰がやれるか」と抵抗したくらいで、「俗に言う年寄の冷や水ではありませんか」と切り返され、観念した。

●陸軍の形だけの粛軍、露骨な組閣干渉に、政党人が黙っていたわけではなかった

▽斎藤隆夫(民政党)は 5月7日 衆議院本会議で

「軍部大臣に向かって少しくお尋ねしたい」

▽まず「軍人の政治運動は断じて厳禁さるべきものなのに、青年軍人が国家改造思想を抱懐していろいろな事件を起こし、それらの事件に対する軍部当局の不徹底な処置が、二・二六事件を惹起したと思われる」続いて 組閣干渉を批判し

「粛軍演説」の 火蓋を切った

省に届けた。

高橋是清は蔵相時代「国防の充実は必要だが、なるべくこれを最小限に止めなければ国の財力は耐え切れない。筆を持てばものを書きたくなるし、剣を持てば人を斬りたくなる。大きな軍備を持たせたら戦争を始めちゃう」軍の要求にブレーキをかけていたから、「高橋財政」は、高度国防国家を目指す統制派に邪魔だった。

磯辺 浅一(いそべ・あさいち)

明治38(1905)～昭和12(1937)山口県生まれ。陸軍中尉の時、陸軍経理学校に入り、一等主計。青年将校運動の中心となり昭和10年免官。二・二六事件で処刑

西 義一(にし・よしかず)

明治11(1878)～昭和16(1941)福島県生まれ。陸軍大将。昭和6年第8師団長となり、軍事参議官を経て二・二六事件後に教育総監に就任したが、8月予備役に

植田 謙吉(うえだ・けんきち)

明治8(1875)～昭和37(1962) 大阪生まれ。陸軍大将。参謀次長、朝鮮軍司令官。昭和11年関東軍司令官となりノモンハン事件(14年)で戦闘を拡大、敗戦の責任をとられされ、事件途中で予備役に

川島 義之(かわしま・よしゆき)

明治11(1878)～昭和20(1945)愛媛県生まれ。陸軍大将。第3師団長、朝鮮軍司令官、軍事参議官を経て昭和10年陸相。二・二六事件終結後に予備役編入

有末 精三(ありすえ・せいぞう)

明治28(1895)～平成4(1992) 北海道生まれ。陸軍中将。昭和7年陸相秘書官。14年軍務局長。参謀本部第2部長などを歴任し、戦後は日本郷友連盟会長

斎藤の「粛軍演説」

「今回の事件に対しては、中央と云はず、地方と云はず、上下有ゆる階級を通じて衷心非常に憤慨して居ります(拍手)それにも拘らず彼等は今日の時勢、言論の自由が拘束せられて居ります所の今日の時代に於て、公然之を口にすることは出来ない、僅に私語の間に之を洩し、或は目を以て之を告ぐる等、専制武断の封建時代と何の変る所があるか(拍手)啻にそればかりではない、例へば今回叛乱後の内閣組織に当りましても、事件に付て重大なる所の責任を担うて居られる所の軍部当局は、相当に自重せられることが国民的要望であったにも拘らず、或は某々の省内には政党人入るべからず、某々は軍部の思想と相容れないからして之を排斥する、最も公平なる所の粛正選挙に依って国民の総意は明に表白せられ(拍手)之を基礎として政治を行ふのが明治大帝の降し賜ひし立憲政治の大精神であるに拘らず(拍手)一部の単独意思に依って国民の総意が蹂躙せらるゝが如き形勢が見ゆるのは、甚だ遺憾千万の至りに堪へないのであります(拍手)それでも国民は沈黙し、政党も沈黙して居るのである、併ながら考へて見れば、此状態が何時まで続くか、人間は感情的の動物である、国民の忍耐力には限りがあります、私は異日国民の忍耐力の尽き果つるの時の来らないことを衷心希望するのであります(拍手)」

▽読売新聞は 翌日の朝刊で

「厳たり議会の威信 不詳事件根絶のため一刀両断の措置を執れ 肺腑つく斎藤氏の舌鋒」

▽東京日日も 社説「国民の声 斎藤氏の大演説」で

「五・一五事件の犬養毅首相の悲惨な死に対して発せられるべき言葉が、満四年後の今日ようやく斎藤氏によって述べられた。いま国民の沈黙は破られ、斎藤氏が窓を開いた」

▽寺内陸相は「斎藤の論旨に同感である」

「文章をもって政治意見を公にすることも、現役軍人には禁止された政治関与である」

斎藤　隆夫(さいとう・たかお)

明治3(1870)～昭和24(1949) 兵庫県生まれ。弁護士を経て明治45年以来、衆院議員当選13回。民政党総務、法制局長官を歴任し、昭和11年粛軍演説。15年支那事変の戦争指導の混迷を批判、軍部追随の議会により除名された。戦後吉田、片山内閣国務相兼行政調査部総裁

犬養　毅(いぬかい・つよし)

安政2(1855)～昭和7(1932)岡山県生まれ。号を木堂。第1回総選挙以来、連続当選18回。護憲・普通選挙運動を推進、「憲政の神様」と称された。少数政党を率い大正14年政界引退を表明したが、昭和4年政友会総裁に推されて6年首相就任。満州国建国に反対、五・一五事件で暗殺

政党は動かなかった

斎藤の演説は、議会で満場の拍手を受け、国民の大きな感動を誘った。ふだん官報なんか読んだことのない一般市民が、速記録の載った官報を奪い合うようにして手にとった。

しかし、議会は動こうとはしなかった。それどころか、斎藤の演説を妨害しようとさえした。民政党の院内総務が来て、「君の演説は都合により取り止めになった」と通告した。斎藤は民政党を代表してではなく、個人の資格で演壇に立ったのだ。

犬養暗殺後の政党は、強いリーダーシップで引っ張って行く人がいなくなっていた。政党は、斎藤、岡田、広田と3代の内閣で政権から離れている。大臣になりたい、ポストを得たいと、軍部に擦り寄り軍部と手を結ぶ代議士が増えていた。

「岡田啓介回顧録」から

二・二六事件は、陸軍の政治関与を

●陸軍は5月18日、「軍部大臣現役武官制」を23年ぶりに復活させた

軍部大臣現役武官制

明治31年6月、憲政党の第1次大隈重信内閣が誕生した時、陸軍の大御所山県有朋は「陸海軍に政党勢力が入ってきたら大変だ」と、危機感を抱いた。第2次内閣を組織すると、33年5月19日、陸海軍省の官制を改正し、職員表の備考に1行「大臣及次官ニ任セラレル者ハ現役将官ヲ以テス」を付け加えた。職員表は陸海軍大臣は大将、中将と規定しており、それまでは大将、中将であれば、予備役、後備役でもよかったのが、現役でないと大臣になれなくなった。

現役の2文字が、第2次西園寺内閣を倒すことになる。陸軍は2個師団増設要求が拒否されると、大正元年12月、陸相辞職で総辞職に追い込んだ。陸軍の要求を容れない内閣には、後任を送らない。陸相がいなくては内閣が作れない。「大正政変」の引き金となり、「憲政擁護・閥族打破」の非難が高まる中、山本権兵衛首相は現役制が憲政運用に支障があるとして、大正2年6月13日、勅令で「現役」の2文字を削除した。

▽広田は なぜ簡単に 復活させたのか
　23年間 予備・後備役の大臣は いなかった
▽しかし 予備・後備役に 広げてあったからこそ
　陸軍が「大臣を出さないぞ」の 脅しで
　　政治に 横車を押すことが 出来なかった
▽寺内は 4月17日の閣議に 復活を提案した
　「現在の制度だと、予備役にした荒木、真崎が、
　　いつ大臣に返り咲くとも限らない。それでは
　　再び派閥抗争が起こり、粛軍が徹底出来ない」
▽「粛軍」の大義名分には 逆らえなかったのか
　反対らしい反対もなく 閣議決定された
▽広田が 寺内に 陸相を要請した時 すでに約束
　現役制受け入れの代わりに 内規をご破算に
　「現役将官の中から首相が自由に選べるように」
▽「現役でなり手がない」と言われれば それまで
　大臣が辞めて 後任を送らなければ 即日崩壊
　内閣の寿命を保とうと思えば 常に 陸軍の鼻息

押さえる最大のチャンスではなかったか。国民の軍の横暴に反対する反感がかなり強く沸き上がった。それを掴めばよかったんだ。その機を逃さずに、国民の常識を足場にして強い政治をやり、軍を押さえつけてしまう。ごくいい潮時だったと思うが、軍に逆らうとまた血を見るという恐怖の方が強くなって、ますます思い通りのことをされるようになった。

大隈　重信（おおくま・しげのぶ）
天保9(1838)～大正11(1922) 佐賀県生まれ。明治3年参議。21年外相となり、条約改正交渉で爆弾を投げられ右足を切断。31年憲政党を結成、史上初の政党内閣を組織。大正3年再び首相となり対独宣戦布告。東京専門学校(現早大)創立者

山県　有朋（やまがた・ありとも）
天保9(1838)～大正11(1922) 山口県生まれ。陸軍大将・元帥。軍政、徴兵制を確立、陸軍の大御所。首相2度。元老として明治・大正の政界に大きな力を揮った

山本　権兵衛（やまもと・ごんべえ）
嘉永5(1852)～昭和8(1933)鹿児島県生まれ。海軍大将。明治31年海相となりロシアに備えて「六六艦隊」を推進。大正2年首相に就任、軍部大臣現役武官制、文官任用令を改正した。12年再度首相

陸軍には「三長官一致」の内規

山本内閣が現役制を廃止した時、慌てた陸軍は「陸相候補者は大臣、参謀総長、教育総監が一致して推薦した者に限る」の内規を作っていた。現役以外の者が大臣になろうとしても、現役である総長、総監の反対で阻止しようとしたのだ。

▽陸軍に「内閣生殺与奪の権」広田の大きな失策
▽陸軍にとっては「政治支配の総仕上げ」
　統帥権独立と共に 軍部独裁の 車の両輪に

●5月18日は、「阿部定事件」が起きた日
▽関脇双葉山が 夏場所で全勝優勝「双葉山時代」
▽8月には ベルリン・オリンピックが開幕
　前畑秀子が 女子200㍍平泳ぎで優勝
　「前畑頑張れ」のラジオ放送に 日本中が熱狂
▽その陰で 広田内閣のもと
　準戦時体制の 国防国家作りが 進められた

●広田の処刑は、昭和23年12月23日午前零時過ぎ
▽死刑になった7人のうち ただ1人の文官だった
▽花山信勝（教誨師・東大教授）が「歌か何か」と 勧めても
　「公の人として仕事をして以来、自分のやったことが残っているから、今さら別に申し加えることはない」遺書も辞世も 残さなかった
▽文官首相近衛が自殺 広田は その身代わり
　明らかに 狙われていたという
▽検事の論告は 峻烈を極め
　「侵略国策の確立者 武力外交の推進者」として
　共同謀議の首謀者に 仕立て上げていった
▽証言を勧められても 証言台に立たなかった
　「私は一切計らわずに来た。首相になったのも外相になったのも、辞退したかったのに已むなくなったのだ。万事自ら進んで計らうことなく今日までやって来た。この期に及んで今さら計らう気はない」立場を弁明しようとしなかった
▽加瀬俊一（外交評論家）「剛直な人、それが広田だった」
▽広田は 外相時代 親善外交に力を入れたし
　中国との関係改善にも 努力した
　どうして 広田内閣を「軍部追随内閣」に

●修猷館中学（福岡藩の藩校）在学中、外交官になる決意
▽日清戦争の 三国干渉（露独仏）に 大きな衝撃
　旅順を無理やり 清国に返させられた
▽頭山満の「玄洋社」に出入りし
　愛国的国権主義の 洗礼を受けていたから
　「日本の外交を強くしなければダメだ」

「阿部定事件」

5月18日、荒川・尾久の待合で割烹経営の石田吉蔵(42)が絞殺死体で発見された。死体の一部が切り取られ、太股には「定吉二人」と血文字で書かれていた。姿を消した美人女中・阿部定(32)は20日、品川で逮捕されたが、新聞は「怪奇殺人」として連日大々的に報道、日本中の話題をさらった。12月に懲役6年の判決。量刑が軽かったのは、「このまま永遠に自分のものにしたい」と、衝動的殺人だったこと。

定は皇紀2600年の恩赦で減刑され、昭和16年5月模範囚として出獄した。

花山　信勝（はなやま・しんしょう）
明治31(1898)～平成7(1995) 石川県生まれ。仏教学者。昭和14年東大助教授となり21年教授。戦犯の日本側教誨師。著に「平和の発見－巣鴨の生と死の記録」

加瀬　俊一（かせ・としかず）
明治37(1904)～平成16(2004)千葉県生まれ。外務省に入りハーバード大留学。松岡外相秘書官を経て昭和16年北米課長。重光外相秘書官の後、終戦時は情報部長。戦後30年国連大使、33年ユーゴ大使。著に「日本外交の主役たち」

苦学した少年時代

福岡に「広徳」という石屋があった。徳平は朝暗いうちから石鎚を振るい年中無休で家業に励んだので、「三十五日さん」（月に35日も働く）。広田は明治11年長男として生まれ、幼名丈太郎。

家が貧しいため、小学生の時からザルに松葉を入れた天秤棒を担いで売り歩いた。教科書が買えないため、友人から借りて毎晩書き写した。

頭山の言葉

よかろう、外交官でも軍人でも思うところに進むがよい。しかし、舟でも片方ばかりに大勢乗ると、その方に傾いて覆る。われは軍人や官僚の反対側に乗って、日本という舟を転覆させないようにするんだ。

「弘毅」と改名

第1高等学校に合格し上京した時、論語の「士は以て弘毅ならざるべからず」、一かどの男子たるものは、度量が広くて、意志が強くなければならないから。東大を卒業し、明治39年の外交官試験に首席で合格した。

●昭和8年9月、斎藤内閣外相に 広田55歳の時
▽「焦土外交」演説をした 内田康哉外相の後
地味だが 重厚な広田を迎えて
外務省の空気は 一変したと言われる
▽外相を要請された時 斎藤首相に 二つの条件
①国際連盟脱退の際の 詔勅の精神に従うこと
「愈々信ヲ国際ニ篤クシ…」
「万邦協和 和協外交」を 外交方針に
②外交政策は 外相を主導者とし
首相は 極力 これに協力すること
明らかに 軍部の干渉阻止の狙い

●国際関係改善に積極的に動き、着実に実績
▽昭和9年3月3日には「広田・ハルメッセージ」交換
広田の「協調の精神を以て当たれば
諸懸案は円満に解決されると確信する」に
ハル米国務長官も 全幅の賛意を表明した
▽北満鉄道(ウラジオ-満州里間1,700㌔) 買収交渉を再開
56回の粘り強い交渉で 昭和10年3月23日買収
▽永田鉄山少将(陸軍軍務局長)の 協力もあったが
ソ連は ウラジオ ハバロフスクに
満州国領事館開設を認め 事実上の満州国承認
日ソ間の緊張も 緩和された

●中でも目覚ましかった対中国関係の改善

頭山 満(とうやま・みつる)
安政2(1855)～昭和19(1944) 福岡県生まれ。国家主義者。明治14年玄洋社を結成し大陸進出を主張する大アジア主義を唱え、孫文、ビハリ・ボースなど、亡命者を援助した。終始、公職につかずに在野生活を続け、政界の裏面で活躍、右翼陣営の大御所的存在となった

玄洋社

明治14年、旧福岡藩を地盤として創立。頭山満を中心とした国家主義的な右翼団体。昭和21年解散。

内田 康哉(うちだ・こうさい)
慶応1(1865)～昭和11(1936) 熊本県生まれ。外務次官、駐米大使を歴任し明治44年外相。3代の内閣で外相を務め満鉄総裁を経て昭和7年斎藤内閣外相。満州国承認、国際連盟脱退を推進した

ジョセフ・グルー(Joseph Clark Grew)
1880～1965 アメリカの外交官。トルコ大使を経て昭和7年駐日大使。日米関係改善に努力し、開戦で帰国。国務省極東局長、国務次官、国務長官代理を歴任し天皇制存続に尽力、著に「滞日十年」

グルー米国大使は日記に

「広田は誠実に外交関係改善に全力を尽くしている。合衆国との間に、よき雰囲気を作ることに成功しつつある」

コーデル・ハル(Cordell Hull)
1871～1955 ルーズベルト大統領時代、昭和8年から19年にかけ米国務長官。16年11月、日米交渉で「ハル・ノート」を提示、日本側は最後通牒と見て太平洋戦争開戦に踏み切った。国連創設に尽力、ノーベル平和賞を受賞した

▽蒋介石の国民政府は 共産軍の内戦に 手一杯
日本には「一面抵抗 一面交渉」の 妥協的姿勢
▽広田は 北京－奉天間直通列車乗り入れ(9年7月1日)
満州・中国間に 郵便物相互取扱協定(9年12月14日)
▽広田は 昭和10年1月25日
衆議院で「戦争はない」と 外交演説

広田の外交演説

私は日本の将来を楽観してはいない。…各国が巨大なる費用を使って軍備の拡張に努めている現状では、日本がいかに平和の方針をもって進むにしても、やはり根本に於いて軍備の充実は必要であると確信している。しかし、将来戦争の恐れがあるかと申すに、少なくとも私が今日の信念をもって申せば、私の在任中に戦争は断じてないことを確信しているものである。

▽中国は 敏感に 反応した
蒋介石は 日本人記者団に
「広田外相の誠意を認め、信義を以て応じたい」
▽国民政府は 2月20日 排日取り締まりを発令
排日言論 掲載禁止を通達
国民党宣伝部長(排日世論を指導)も 更迭した
▽中国駐在公使を 大使に昇格させた(5月17日)
林銑十郎(陸相)は「事前に相談がなかった」
「外交権限に関する事」と押し切り 閣議決定
▽大使館昇格は 相手国を 大国として遇すること
中国側は びっくりもし 大変な喜び様
直ちに 大使昇格の措置
米英も慌てて 大使交換に 踏み切った

●陸軍は、広田和協外交に白い目を向けていた
▽関東軍 支那駐屯軍は「華北分離工作」を進め
日中接近ムードを ぶち壊していった
▽5月2日夜～3日未明 天津の日本租界で
親日派の中国人新聞社長 2人が暗殺された
▽酒井隆大佐(支那駐屯軍参謀長)は 何応欽(北京軍事委員会責任者)に
「抗日テロは、国民政府が煽っているのだ」
河北省からの 国民党機関 中国中央軍撤退と
河北省主席の罷免を 要求した

永田 鉄山(ながた・てつざん)
明治17(1884)～昭和10(1935)長野県生まれ。陸軍少将。陸軍省動員、軍事課長を経て昭和9年軍務局長。総動員体制の基礎を作る。統制派の頭目と目され、皇道派相沢中佐に殺害される。死後中将

蒋 介石(しょう・かいせき)
1887～1975 明治40年日本に留学、陸軍が中国人のために作った振武学校で学ぶ。大正15国民革命軍総司令となり、中国統一軍事行動を開始。昭和3年国民政府(南京)主席に就任。支那事変で国共合作を受け入れ対日戦を指導。戦後、国共内戦を起こし、敗れて24年台湾に渡る

「華北分離工作」

華北とは、中国北部のこと。北京・天津両市と河北・山西両省、モンゴル自治区(当時の察哈爾=チャハル省と綏遠省)の黄河中流・下流地域。満蒙を「日本の生命線」として満州事変を起こした関東軍は、それが手に入ると今度は生命線を守るための安全地帯が必要に。鉄、石炭や石油、棉花の豊富な資源も魅力。華北を国民政府から引き離して日本の支配下に置こうとした。

陸軍の対中国政策(昭和8年9月)

華北方面に緩衝地帯を設定する。努めて親日地域を設定させる。そのため、特に支那の分立的傾向に即応し親日分子の養成、この組織化を促進する。

酒井 隆(さかい・たかし)
明治20(1887)～昭和21(1946)広島県生まれ。陸軍中将。済南駐在武官を経て昭和4年天津駐屯歩兵隊長。参謀本部支那課長、支那駐屯軍参謀長、張家口特務機関長を歴任。16年第23軍司令官となり、香港攻略。南京で戦犯として処刑

▽酒井は 梅津美治郎少将(軍司令官)が 出張する時
警告内容も知らさず「軽く警告しておきます」
▽国民政府は 広田に 条件緩和斡旋を申し入れ
「自発的措置として
河北省政府を保定(北京南300キロ)に移動させる」
▽広田は「支那駐屯軍と直接交渉して
局地的解決を計るのがいい」外交交渉を拒絶
▽関東軍も 山海関に兵力集結 武力威嚇の姿勢
▽国民政府は 6月10日 要求を全面的に受け入れ
排日運動禁止命令も約束「梅津・何応欽協定」
▽6月27日には 土肥原賢二少将(奉天特務機関長)と
秦徳純(察哈尔代理主席)の間で「土肥原・秦徳純協定」
国境(満州)付近から宋哲元軍撤退 排日機関解散
▽国民政府は 9月7日「日中間に三原則設定」提案
①相互の完全な独立尊重②両国の真正な友誼の
維持③両国間事件の平和的外交手段による解決
蒋介石の「満州国については独立は承認出来
ないが、今日はこれを不問に付す」の 意向も
▽10月7日「広田三原則」を回答した
①排日の徹底的取り締まりと欧米依存政策から
の脱却②満州国の事実上の承認③共同防共
▽中国側は不信感「二重外交」「和協外交は擬装だ」

中国の幣制改革

銀本位制を採用していたが、多くの銀行から銀貨が無統一、乱雑に発行されていた。米国の銀買い上げ政策で大量の銀が流出、金融逼迫、物価下落、旱魃、水害も重なり、恐慌状態に。
英国政府は、国民政府の要請で財政顧問リース・ロスを送り、昭和10年11月3日、銀本位制をやめて管理通貨制度を実施させた。1千万ポンドの資金を提供、政府系3銀行が発行した紙幣を法定通貨として、ポンドとリンクさせた。金融市場は平静を取り戻し、英国が経済主導権。

▽リース・ロスは 9月6日
英皇帝の 天皇宛て親書を持って
日本に立ち寄り 共同借款を提案した
「日英協力し新通貨を発行、幣制改革をしよう」
「日本が借款に応ずれば、
中国に満州国承認を勧告する」

何 応欽(か・おうきん)
1890～1987 中国の政治家。日本の陸士卒。早くから蒋介石の腹心となり、軍の要職や行政院長を歴任した

支那駐屯軍

明治33年、列強の中国侵略に怒った義和団(白蓮教系の秘密結社)が、北京の各国公使館を包囲した時、日本や欧米8ヵ国は連合軍を編成、北京を解放した。翌年の講和議定書で居留民保護の名目で、北京公使館地区と天津の租界、北京ー山海関鉄道沿線の要地に警備兵を配置することを認めさせた。
日本は明治34年7月3日、北清駐屯軍を編成。45年清国滅亡、中華民国誕生で支那駐屯軍と改称。兵力は2千人余りで天津に軍司令部を置いた。

梅津 美治郎(うめづ・よしじろう)
明治15(1882)～昭和24(1949)大分県生まれ。陸軍大将。昭和9年支那駐屯軍司令官。11年陸軍次官。第1軍、関東軍司令官を歴任し、19年参謀総長。A級戦犯で終身禁固刑を受け、拘置中に病死

酒井は「済南事件」謀略の首謀者

昭和3年5月、蒋介石が中国統一の軍事行動を起こし済南(山東省省都)に迫った時、酒井(済南駐在武官)は「邦人280人虐殺さる」の情報を流して田中義一内閣に山東出兵を拡大させた。実際は、立ち退き勧告に応じなかった麻薬業者12人が殺されただけだった。

土肥原 賢二(どいはら・けんじ)
明治16(1883)～昭和23(1948)岡山県生まれ。陸軍大将。昭和6年奉天特務機関長となり、関東軍の政治工作を担当。航空総監、教育総監、第1総軍司令官歴任。A級戦犯として処刑された

▽貨幣統一は 中国統一につながる 軍部は反対
内閣では 高橋蔵相だけが 賛成したが
広田も「到底成功の見込みがない」と 断った

●幣制改革成功に、「華北分離工作」を急いだ
▽土肥原は 11月25日 殷汝耕に
通州(河北省)で 自治宣言を発表させ
冀東防共委員会(冀は河北省の別称)を 設立させた
▽国民政府も 12月18日 北京に
冀察政務委員会を作り 委員長に宋哲元

華北へ日本商品がなだれを打つように

冀東政権は、関東軍の指導の下に低率の輸入税(国民政府の関税の7分の1~4分の1)を設定したから、国民政府の税収は激減し、大打撃を受けた。

▽親日派の汪兆銘が 11月1日 狙撃され重傷
行政院長・外交部長を辞職
日中関係は ますます 対立を深めていく

●だんだん軍部に押されて行く広田
▽この頃の広田は「陸軍の出先は何をやっているんだか、わけがわからん。実に困ったものだ」
▽重光葵(広田外相の下で次官)は「広田は軍部内閣論者」
「実力を以て国政を動かしている者に、責任を持たせて国民一般の批評にさらし、裏面の策謀を防止するようにしなければ、政治はいつまでたっても責任あるものにならず、謀略の犠牲に」
▽広田の外交努力が
軍部に 次々と 足元をすくわれて行く
それなら 軍部に 一度やらせて責任を
▽広田が そう考えている時に 内閣を引き受ける
そこに 広田の悲運 軍部歩み寄りの姿勢も

●福岡県から出た初の総理に、郷里は沸いた
▽父徳平(88歳)も 喜んで上京
記者団に「人間はなァ、飯さえ食わしとけば自然に大きゅうなるもんたい。勉強が好きじゃったけん、勝手に勉強させたばっかりでなァ。あの時、石屋でもしとけば、今頃、相当な親方になっとったかも知れませんたい」

殷 汝耕(いん・じょこう)
1887～1947 中国の親日政治家。早大卒業後、国民政府に入り妻は日本人。上海事変の時に上海特別市長として休戦に努力。戦後、漢奸として処刑された

汪 兆銘(おう・ちょうめい)
1883～1944 字は精鋭。日本に留学し法政大卒。孫文の下で革命運動に従事。蒋介石と合作政権を作り、行政院長。支那事変中に反共親日の和平運動を起こし昭和13年重慶を脱出。15年、南京に設立された国民政府主席。名古屋で病死

瀬島龍三さんの言葉

「日本が支那事変に突入する最大の禍根は、現地軍の不用意な華北工作にあった」

瀬島 龍三(せじま・りゅうぞう)
明治44(1911)～平成19(2007)富山県生まれ。陸軍中佐。大本営参謀を経て昭和20年関東軍参謀。シベリアに11年抑留。帰国後33年伊藤忠に招かれ副社長を経て53年会長。中曽根首相のブレーンの1人で、臨時行政改革推進審議会会長

「広田外相の行方不明」

重大なる外交問題に対して、外務省はいかなる発言を有しているか。北支方面では外交官は並び大名の役目さえもつとめておらぬ。広田外相は、国家のために少なくとも二つのこと、すなわ第一に、外交は外務省の畑であることを主張し、第二に、閣議と重臣勢力の承認を得て、東亜の安定のために主導力を発揮すべきだ。暫く行方不明であった広田外相は、もうポチポチその姿を現してもいいと思うが。(中央公論昭和11年1月号)

●陸軍は、矢継ぎ早に戦時体制移行政策
▽昭和11年6月8日「国防方針」を第3次改訂
▽中心は 参謀本部に 戦争指導課を新設(6月5日)
初代課長になった 石原莞爾大佐(前作戦課長)
▽石原を 愕然とさせた
極東での 日ソ両軍の
大きな戦力差
▽満州が 日本の支配下に
危機感を強めたソ連は
極東の軍備を 急テンポで 拡充強化した
▽統制経済を目指す「石原構想」が 走り出す
軍需産業を拡充 重化学工業の飛躍的向上
▽国防方針で 海軍の主張も容れ 米ソを仮想敵国
▽途方もない 大軍備拡張計画に
陸軍 平時27個師団(満州10 朝鮮3) 戦時50個師団
海軍 主力艦(9隻)12隻 航空母艦(4隻)10隻

日ソ戦力比較

	師団	航空機	戦車
満鮮日本軍	5	220	150
極東ソ連軍	14	950	850

●馬場蔵相は就任早々、「高橋財政」を修正した
▽軍部迎合の財政方針 公債発行 増税 低金利政策
▽12年度予算案は 総額30億4,100万円(33%増)
軍事費が 14億900万円 歳出の46.3%
▽寺内陸相は 新聞記者に「三十億くらいに
驚いてはならぬ。五十億でも百億でも構わぬ」
▽軍拡予算の財源 10億円の赤字公債 6億円の増税
▽結果として 猛烈なインフレに
▽11月に 予算案が発表された途端
卸売物価は 上昇を続け 5ヵ月で22%も高騰
▽商社が争って 軍需品の原材料を 海外発注
輸入が急増 国際収支は 大幅な赤字転落
▽横浜正金銀行の 手持ち外貨が 底を尽き
輸入品支払いのための 為替取引を
大蔵省の統制下に「官僚統制」の始まり

●「国策ノ基準」が、東京裁判で広田の不利な材料に
▽8月7日 五相会議(首相 外相 蔵相 陸海相)で決定
▽石原大佐の主張する 対ソ優先論に対し
海軍の顔も立てて 南進政策も折り込んだ
「南北併進論」が 侵略政策の共同謀議だと
▽広田は 巣鴨拘置所で 東郷重徳(のち外相)に
「単に予算を取るために軍部に於て拵えたもの」

重光 葵(しげみつ・まもる)
明治20(1887)～昭和32(1957)大分県生まれ。中国公使の昭和7年天長節祝賀式で朝鮮人の投げた爆弾により片足を失う。8年広田外相の下で次官。ソ連、英国大使を歴任、18年東条内閣外相。小磯内閣にも留任。A級戦犯として禁固7年を宣告され25年仮出所。27年衆院議員。改進党総裁となり、鳩山内閣副総理・外相

石原 莞爾(いしはら・かんじ)
明治22(1889)～昭和24(1949)山形県生まれ。陸軍中将。昭和3年関東軍参謀。満州事変を起こし、満州国建国を推進。10年参謀本部作戦課長。12年作戦部長。支那事変不拡大を主張したが容れられず関東軍参謀副長に転出。東条と対立、16年京都師団長で予備役。翌年、立命館大教授となり民間で東亜連盟運動を指導

「国策ノ基準」(昭和11年8月7日)
「…帝国内外ノ情勢ニ鑑ミ当ニ帝国トシテ確立スベキ根本国策ハ外交国防相俟ッテ東亜大陸ニ於ケル帝国ノ地歩ヲ確保スルト共ニ南方海洋ニ進出スルニ在リ」とし、国防軍備の整備では「(イ)陸軍軍備ハ蘇国ノ極東ニ使用シ得ル兵力兵力ニ対抗スルヲ目途トシ特ニ其在極東兵力ニ対シ開戦初頭一撃ヲ加ヘ得ル如ク在満兵力ヲ充実ス (ロ)海軍軍備ハ米国海軍ニ対シ西太平洋ノ制海権ヲ確保スルニ足ル兵力ヲ整備充実ス」

東郷 重徳(とうごう・しげのり)
明治15(1882)～昭和25(1950)鹿児島県生まれ。昭和8年外務省欧亜局長となりドイツ、ソ連大使歴任。16年東条内閣外相。20年再び鈴木内閣外相に就任、終戦に尽力。東京裁判で禁固20年。拘置中病没。著に「大戦外交の手記 時代の一面」

▽予算獲得の作文が 膨大な軍事費となり
「大きな軍備を持てば戦争を始めちゃう」(高橋)

●大きなミスは、日独防共協定(昭和11年11月25日締結)
▽表向きは 共産主義思想蔓延を防ぐための協力
戦前は 秘密にされていた 付属協定があった
軍事協定が 日独伊三国同盟(昭和15年9月27日)に
▽お膳立ては 大島浩大佐(ドイツ駐在陸軍武官)と
ナチス党外交責任者 リッベントロップ
▽有田八郎(外相)「ドイツと余り深入りした関係に入るのは好ましくないが、薄墨色程度の協定なら、ソ連を牽制するためにもいいだろう」
▽各国大使の中で 吉田茂(駐英大使)だけが 強硬に反対

吉田の先見性

駐英陸軍武官辰巳栄一中佐(のち中将)に、陸軍省から訓令が来た。「協定の趣旨を説明し吉田の同意を得るよう努力せよ」吉田は「軍部は、ナチス・ドイツの力を買い被り過ぎている。この際何も日本が飛び込んでドイツにつく必要はないじゃないか。自分はむしろ英米を選ぶ。これが日本の採るべき道だと信じている」

辰巳は「微力、説得するを得ず」と返電したが吉田は言ったという。「ヒットラーのあの無軌道なやり方を見ておると、きっと欧州に将来、戦乱が起こるだろう。戦争が拡大した場合、日本が巻き込まれる恐れがある。いったい、英米を相手に日本軍部は勝ち目があるのか」

辰巳は「当時すでに第2次世界大戦、ひいては日本の参戦を予見した吉田の鋭い勘には、全く敬服のほかはなかった」

▽ドイツは 昭和14年8月23日「独ソ不可侵条約」
秘密協定第2条「ソ連との間に一切
政治的条約を結ばない」を 一方的に破った

●11月17日、「憲政の殿堂」国会議事堂が完成した
▽17年の歳月 2,600万円の巨費を投じた
▽祝賀会に出席した「憲政の神様」尾崎行雄は
「実に恥ずかしい。こんな立派な議事堂が出来ても、さて、そこに入る議員たちはどうでしょう」

日独防共協定の秘密付属協定

第1条 締約国ノ一方カ「ソヴイエト」社会主義共和国連邦ヨリ挑発ニヨラサル攻撃ヲ受ケ又ハ挑発ニ因ラサル攻撃ノ脅威ヲ受クル場合ニハ他ノ締約国ハ「ソヴイエト」社会主義共和国連邦ノ地位ニ付負担ヲ軽カラシムルカ如キ効果ヲ生スル一切ノ措置ヲ講セサルコトヲ約ス

第2条 締約国ハ本協定ノ存続中相互ノ同意ナクシテ「ソヴイエト」社会主義共和国連邦トノ間ニ本協定ノ精神ト両立セサル一切ノ政治的条約ヲ締結スルコトナカルヘシ

大島 浩(おおしま・ひろし)
明治19(1886)～昭和50(1975)岐阜県生まれ。陸軍中将。昭和9年駐独陸軍武官、13年大使。独ソ不可侵条約で一旦辞任、15年再び大使となり日独伊三国同盟締結を推進。A級戦犯で終身刑、30年出獄

リッベントロップ(Ribbentrop)
1893～1946 ドイツ・ナチス党の外交責任者。昭和13年外相となり、独ソ不可侵条約、日独伊三国同盟を締結。ニュールンベルク裁判で死刑判決を受け絞首刑

有田 八郎(ありた・はちろう)
明治17(1884)～昭和40(1965)新潟県生まれ。昭和2年外務省アジア局長となり外務次官、中国大使歴任。11年広田内閣外相。近衛、平沼、米内内閣でも外相

尾崎 行雄(おざき・ゆきお)
安政5(1858)～昭和29(1954) 神奈川県生まれ。号を咢堂。第1回総選挙以来、連続当選25回。文相、東京市長を歴任。「大正政変」で護憲運動の先頭に立つ。昭和27年代議士生活63年で、国会から「名誉議員」の称号。没後、「尾崎記念館」設立

▽陸軍は 政治攻勢を 強めていた
政党を改造するとか
内閣制度改革案を 勝手に作って 発表した

●軍部批判の怒りを爆発させた浜田国松（政友会、前衆院議長）
▽昭和12年1月21日 新装成った議事堂で
寺内陸相に対し 軍の政治関与を 追及した
「軍人も無論国民の一人である。政治運動をなさんとせば、よろしく軍服を脱ぎサーベルを棄てて無腰になって政党を作るのがよろしい。軍という立場において、政治を動かさんとするところに危険がある。政治は我々の本領であって、軍の本分は他に存するはずである」
▽議場は 割れんばかりの拍手喝采
星島二郎（政友会）は「寺内は顔を真っ赤にして体をブルブル震わせていた」「腹切り問答」に
▽議会は 2日間の停会となり
新聞は「政党、軍部遂に正面衝突」
▽陸軍は 直ちに声明「自ら省みるところなき現在の政党とは、共に庶政一新を語れず」
▽政党は どうして 反撃声明を出さなかったのか
▽陸軍は さらに 追い打ちをかけてきた
「衆議院を解散し、政党が浜田を除名すれば責めない。しかし、政府が同意しない時は、陸軍大臣が単独辞職する」「現役武官制」の爆弾
▽閣僚は「解散する意味がない」と 譲らず
広田内閣は 1月23日 総辞職した
▽星島二郎は「浜田演説が結局一匹狼に終わってしまって、結束の力にならなかったことが、日本の不幸になった」
▽広田は 馬場財政が 行き詰まり
「腹切り問答」に 投げ場を求めたのだ
巣鴨拘置所で 賀屋興宣に「経済で潰れちゃったんだ。為替が行き詰まって動かなくなった」

●西園寺は24日夜、後継首相に宇垣一成を奏請した
▽陸軍を 押さえられる人物として 宇垣を
▽湯浅（内大臣）が 寺内（麹）に 探りを入れると、
「以前は反対が強かったが、もういい時分」
▽陸軍幕僚グループは 早々と「宇垣排撃」

浜田　国松（はまだ・くにまつ）
明治1（1868）～昭和14（1939） 三重県生まれ。弁護士から政界に入り、明治37年以来衆院議員当選12回。国民党、革新倶楽部、政友会に所属、衆院副議長経て昭和9年から11年にかけ衆院議長

星島　二郎（ほしじま・じろう）
明治20（1887）～昭和55（1980）岡山県生まれ。弁護士から大正9年以来衆院議員当選17回。戦前は政友会に属し、戦後吉田内閣商工相。昭和33年衆院議長

「腹切り問答」
寺内 只今浜田君のお述べになったいろいろなお言葉を承りますと、中には或いは軍人に対して、いささか侮蔑さるるような如き感じを致すところのお言葉を承りまするが。
浜田 どこが侮辱されているのか。いやしくも国民の代表者の私が、国家の名誉ある軍隊を侮辱したという喧嘩を吹き掛けられては、後へ引けませぬ。私のどの言葉が軍を侮辱したか、事実を挙げなさい。
寺内 侮辱するがごとく聞こゆるところの言辞は、却って浜田君の云われる軍民一致の精神を害するから、ご忠告申し上げたのである。
浜田 私は年下の貴方に忠告を受けるようなことはしない積もりである。速記録を調べて、僕が軍隊を侮辱した言葉があったら、割腹して君に謝する。なかったら、君割腹せよ。

賀屋　興宣（かや・おきのり）
明治22（1889）～昭和5ふ（1977）広島県生まれ。昭和11年大蔵省理財局長。次官を経て12年第1次近衛内閣蔵相。16年東条内閣で再び蔵相。A級戦犯で終身刑。33年出所し政界復帰、38年池田内閣法相

▽陸軍省課長クラスは「次期内閣への要望書」
・首相として 排撃すべき筆頭は 宇垣
・希望すべき閣僚は 軍拡協力の馬場鍈一
・党籍を離脱しない政党員入閣も 絶対反対
▽24日夜9時過ぎ 陸軍首脳部は 緊急会議
梅津美治郎(次官)は「宇垣でもいいじゃないか」
▽「宇垣排撃」に纏めたのは 石原莞爾(戦争指導課長)
「粛軍の途上で派閥感の強い宇垣は適当でない。国防充実を図ろうとしている時、軍縮をやった宇垣を首相に迎えるのは大問題だ」
▽石原が 担ぎたいのは 林銑十郎
宇垣では 力があり過ぎて 国防強化の邪魔
部下に言いなりの林なら 自由自在に出来る
▽陸軍首脳会議の決定だから 現役大将 中将は
宇垣内閣では 陸相を引き受けられなくなった

●宇垣の車は、六郷橋の袂で停められた
▽中島今朝吾中将(憲兵司令官)が 寺内陸相の伝言
「軍の若い者が騒いでいて、容易ならぬ情勢だから、大命を辞退してほしい」
▽宇垣は 軍隊が動く恐れがないと 確かめると
参内し 25日午前1時過ぎ 組閣の大命を受けた
▽「陸軍の壁」は 厚かった
寺内は26日夕「三長官会議で三人の候補を決め、それぞれ交渉したが、いずれも断られた。陸軍には他に推薦する人物がいない」
▽陸相時代 可愛がっていた小磯国昭(朝鮮軍司令官)らに
電話しても「三長官同意なら出ます」
▽宇垣は 5日目の1月29日 組閣を断念した
▽2月2日 陸軍の思惑通り 林銑十郎内閣
「何もせんじゅうろう内閣」と 言われたくらい
無能無策 4ヵ月の短命内閣に 終わった

●昭和21年5月、吉田茂が首相になり「吉田時代」
▽東京裁判も 5月3日 旧陸軍省法廷で始まった
2階記者席の片隅には いつも 2人のお嬢さん
▽静子夫人は 5月14日 巣鴨拘置所で
広田と 金網越しの 面会をした後
夜 鵠沼の別邸で 服毒自殺した
▽夕食で 乃木希典大将夫妻の殉死が 話題に

陸軍省「軍務課政変日誌」

「宇垣総理大臣候補者ヨリ陸軍大臣推薦ノ交渉ヲ受ケタル場合ニハ、左ノ理由ヲ以テ拒絶スルヲ要ス。宇垣総理大臣ノ許ニテハ陸軍大臣トシテ部内統制ノ責ニ任シ得ル者無シ。

現役制復活が宇垣の首を絞める

皮肉なことに、山本内閣が現役制を廃止した時、怪文書まで流して反対の先頭に立ったのは当時軍事課長の宇垣だった。だから復活した時、日記に「軍部大臣任用資格が復旧したり。誠に結構至極である。余が過去に於て身命を賭して争いし問題も、時代の力により安々と解決したのは祝うべきである。それについても、あれ程力を入れて争い来りし政党者流がギューの音も出さぬは、その無力のほど呆れ入りたる次第なり」

中島　今朝吾(なかじま・けさご)
明治15(1882)～昭和20(1945)大分県生まれ。陸軍中将。憲兵司令官、第16師団長、第4軍司令官歴任。昭和14年予備役

小磯　国昭(こいそ・くにあき)
明治13(1880)～昭和25(1950)山形県生まれ。陸軍大将。昭和6年陸軍次官。朝鮮軍司令官を経て平沼、米内内閣拓務相。17年朝鮮総督。19年首相に就任したが、戦局悪化で20年4月総辞職。A級戦犯で終身刑となり、服役中に病死

「宇垣人気」は凄かったが

組閣本部には4,200通もの激励の手紙、毎日「頑張れ」の電報が殺到した。松江の小学校4年の女の子は「お年玉に貰ったお金ですがお国のために役立てて」と、1円の為替を送って来た。

▽静子夫人は「私なら先に死ぬわ」
「パパを楽にする方法が一つあるのよ」
▽広田は 夫人自殺の知らせに
ただ深く 首肯いただけだったが
その後も 夫人宛ての手紙を 書き続けた
検閲官の便宜を 考えたのだろう
片仮名で「身体に異常なし 安心あれ」

●広田の死刑判決は6対5、たった1票差だった
▽処刑当日 最後に面会した
花山信勝教授に 言っている

広田最後の言葉

日本のどこかに、静かに世界の動きを見る人がいなければなりませんね。この忙しい時代に、いちいち世界の動きなどを考えている人はいないから。

相思相愛の二人だった

広田が上京、小石川で修猷館出身の5人と下宿の自炊生活を始めた時、家事を手伝ってくれたのが近くに住む玄洋社幹部月成功太郎の次女静子(日本女子大付属女学校生徒)。結婚は明治38年秋。

実はその前に縁談があった。その年の外交官試験は英語に躓いて落第したが、資質が認められたのだろう。外相経験者の加藤高明から岩崎弥太郎の三女との結婚(長女は加藤夫人、次女は幣原喜重郎夫人)を奨められた。広田は断り、静子と結婚して39年の外交官試験に合格。

加藤　高明(かとう・たかあき)
万延1(1860)～大正15(1926) 愛知県生まれ。三菱に入社、岩崎弥太郎の知遇を得て英国留学。明治33年伊藤内閣外相。駐英大使、西園寺、桂、大隈内閣外相。大正5年憲政会を組織し、13年首相

岩崎　弥太郎(いわさき・やたろう)
天保5(1834)～明治18(1885) 土佐生まれ。明治7年の台湾征討で軍事輸送に協力、三菱財閥の基礎を築く。参議の大隈重信を後ろ盾に郵便汽船三菱を設立、日本最大の海運会社にした

幣原　喜重郎(しではら・きじゅうろう)
明治5(1872)～昭和26(1951) 大阪生まれ。駐米大使、ワシントン会議全権を経て大正13年以来加藤、若槻、浜口内閣外相。親英米路線・平和外交を展開した。昭和20年10月首相。24年衆院議長